

節用集の人名

近藤 尚子*

Person's names in Setsuyoshu

Takako Kondo

要旨 いわゆる古本節用集の諸本において、人名は一語から五百語以上と本によって収載項目数に大きなばらつきがみられる。節用集が編纂の資料にしたとされている下学集では人名の項目数にはほとんどゆれがなく、人名の項目数のゆれは節用集の辞書としての性格にかかわるのではないかと考えられる。そこで節用集諸本から六本を選び、人名について検討した。その結果、節用集でも全体として人名は増補される傾向にあること、その増補には中国の書画家や日本人の姓という大きな二つの方向があり、それぞれの本によって濃淡があることがわかった。また、中国の書画家や日本人の姓を附録としてもつ本もあり、節用集において人名は本文としては必要不可欠の項目ではないという見方もできる。和歌や連歌を中心とした韻事に連なる一面をもつ節用集に必要不可欠であった「名所」に比べて「人名」は韻事と直接かわるとは考えにくい。むしろ節用集に接する人々の興味のあり方がそこにはあらわれているとみるべきであろう。節用集がもつに至る多くの附録と同様、人名は百科事典的な知識への欲求の表出なのである。

はじめに

節用集饅頭屋本は伊勢本系節用集の中では堺本と並ぶ数少ない版行本である。少なくとも三種類の版があることが知られている。体裁は横本九八丁の小冊で、極端にスペースを切りつめたため、掲載された項目のほとんどが注を欠いている。門名は、いわゆる初刊本

と通行本とで異なるが、いま初刊本である教育大学本で示すならば、

天地 時節 草木 人倫 支体 官名 畜類 財宝 食物

言語

の十門である。ところが、上部にのみ「人名」門があつて、「融大
臣」(トウルノヲトミ)一語だけが収められている。この語は、通行

*今野尚子 本学助教 国語学

本でもその覆刻でも同様に保存されている。つまり、饅頭屋本は人名を全体でたった一語「融大臣」のみ載せるのである。この「融大臣」は偶々残ってしまったのか、それ以上の意味を見出すべきなのか。他の節用集諸本の状況なども見比べつつ、節用集における人名のもつ意味をさぐってみたいと思う。

I

下学集が節用集編纂の資料であることは夙に知られている。山田忠雄（一九六八）は下学集の人名門に収載された語数について、最少四八、最多五八であって、「諸本間のゆれはきはめてすくない」としている。一方の節用集はどうであろうか。饅頭屋本の一語は例外であって、他の諸本は「人名」をもっと収載している。管見では、最少は増刊下学集の二四語であり、永禄二年本類の枳園本（約四百語）・経亮本（約四二〇語）・堯空本（五四〇語）などは「姓」を多数増補した結果、多くの「人名」を持つに至った。下学集では「きはめてすくな」かった諸本間のゆれが、節用集では一語から五〇〇語以上ときわめて大きくなっている。いくつかの本についてどのような「ゆれ」が見られるのかを明らかにしたいと思う。

そこで下学集人名門の語と節用集諸本のうちの六本を選び対照したのが〈表〉である。諸本の選定にはいろいろな条件が考えられるが、「ゆれ」を検討するという目的と、人名の項目数などを考慮した。その結果、伊勢本略本から増刊下学集と増刊節用集、伊勢本増補本から広本、印度本から永禄二年本類の永禄二年本と堯空本とを選び、版本として易林本を加えた。また下学集は元和三年版を用いた。

さて、下学集の人名と最もよく一致するのは永禄二年本である。五一語が一致しているが、一致しないのはすべて〈表〉で△が付された項目、すなわち元和三年版の独自項目である。この六語は他の諸本でも収載されていないことが明らかである。ただ、褒姒が易林本にみえているが、下学集の注が〈褒国ヨリ幽王ニ献（ケン）ス／故ニ褒姒ト名ク也〉¹であり、易林本では〈周之幽王之后也／見烽火言咲〉とあって全く異なっている。たとえば同じホ部の布袋〈弥勒之／化身〉やへ部の扁鵲〈周末戦国／時之名醫〉などが下学集の注の一部とほぼ一致することからみれば、易林本の褒姒が下学集に由来するものでないことは明らかであろう。

つぎに節用集における人名の所属をみる。伊勢本略本系の諸本では人名門を立てず、「人倫」に収めようとする傾向が強い。しかし必ずしもそれは統一されてはいない。〈表〉の増刊節用集に明らかかなように主として人倫門に人名を掲出するが、人名門もリ・ワ・マ・ケ・テ・サ・シ・モ・セの九つの部にみられる。中でもケ部では人倫門に「原憲・月山・月壺」がみえるが、畜類・草木に次いで人名門があり、「験者・教者・原憲」の三語を載せる。このうち「原憲」には符号が付けられており、重複を示すものと思われる。またシ部では「聖德太子」を人倫門に収めるが、別に人名門を立てて六項を収める。「舜學・日観」はここに入っているのである。

このほか玉里本・龍門文庫本（二七七）・岡田希雄本にも「人名」門がみられる。岡田本でいうと人名を収載する部が二六あるうちで「人名」門を立てるのは、ハ・チ・リ・ヲ・ワ・カ・ラ・ク・ヤ・ケ・コ・テ・サ・キ・ユ・シ・モ・セ・スの一九部。イ・ホ・ヘ・ト・タ・ソ・エの七部は人名を人倫門に掲出している。また、ク部

では人名門に「元三大師・呉綾・俱生神・宮内・内藏頭・藏人・関白」の七語を掲げるが、後の四語は「官名」門に収めるべきものであろう。ク部には官名門がないので、あるいは門名を表示しそこなかったものか。また、シ部では「人名」を連続して二回表示する。先の「人名」門には「晋七賢・商山四皓・四睡」が掲げられ、後の人名門には「聖徳太子」以下七人の名が挙げられている。二つの人名門は性格が異なるといえ、単なるミスではないのかもしれない。増刊下学集のキ部に人倫門が重出するのとちょうど逆の現象とみることのできる。

伊勢本増補本系の広本は〈表〉からも明らかなように人名で統一されている。しかし、同じ増補本系の辞林枝葉では門名は「姓名」門であり、表示は上一字だけの「姓」に統一されている。これも節用集の人名増補の一つの方向を示しているのであるが、辞林枝葉の「姓」には必ずしも「姓」でないものも収められており、姓のない「姓」門はホ・ヘ・ト・チ・リ・ヲ・ワ・カ・ラ・ヤ・ケ・ユ・ヒ・モ・セの十五にのぼる。

印度本では人名門を立てることが主流であるが、永禄二年本の扁鵲のように人倫に収められるものも少数ではあるが存在する。永禄二年本類ではほかに村井本・慶長九年本で同様であり、弘治二年本類ではコ部に人倫門の重出がある。

版本である易林本にもやはり「ゆれ」がみられる。易林本では伊勢本略本と同様人倫門を主とするが、後半のキ・ユ・シ・エの四部に「人名」門が立てられている。〈表〉でいえば「聖徳太子・行基菩薩・吉備大臣・鬼神大夫・耆婆・日観・舜擧」の七語が人名門の所属であり、それ以外の項目との間で所屬門に「ゆれ」が生じている。

このように「人名」門を立てることについても、立てた場合にはその立て方についても「ゆれ」がみられるのである。

つぎに〈表〉で採り上げたいくつかの本について人名を検討してみる。

II 増刊下学集と増刊節用集

まず増刊下学集ではつぎの十四項が増補されている。それを挙げると次のようである。

土佐正存・大伴黒主・項羽・高祖・元三大師・呉績・荆珂・豊干禅師・役優婆塞・木曾義仲・鍾馗大臣・秦始皇・晋武楊・是害坊

内訳を見ると日本の人名が四項、外国の人名が十項である。⁽²⁾

つぎに増刊節用集を見る。右に挙げた十四項のうち大伴黒主・元三大師・呉績・役優婆塞・鍾馗大臣・是害坊の六項は増刊節用集にも収載されている。

下学集と一致する項目は三九である。これにはキ部人倫門の「大夫」を含む。この語は注に「名乗行平」とあり、「鬼神大夫」であるべきことがわかる。ケ部とシ部の人名門については先述したとおりである。このほかにテ部人名門はテ部の最後、言語門よりあとにおかれている。収載項目には「貞女・哲仁・敵・徴夫・鉄拐仙人・定家 家隆・重隆」がある。「鉄拐仙人」は〈表〉からも明らかなように下学集から入ったと考えられる。「定家 家隆」は節用集で増補された項目であるが、それ以外の五項は「人名」にふさわしいとは考えにくい。また、セ部では人倫門に「是害坊」が見られるが、他に

人名門を立て、「禅月大師・雪窓和尚・政黄牛郁山王・西施・先祖・禅僧」を載せる。さらに畜類門のあとに第二人名門があり、「禅師・禅衲・禅客」を掲げる。第一人名門の「先祖・禅僧」と第二人名門の三語とはこれも「人名」にふさわしいとは考えにくい。むしろ人倫門に入るべき項目であろう。そのうち四語が「禅」であろうことには注目してよいかと思う。

こういった語を除くと、人名にあたるものは七九語である。このうち下学集に一致するものは「表」によれば三九語、ほぼ半数である。残る四〇語が増刊節用集に至るまでに増補された項目ということになる。いまそれを注を手懸かりにみていくと、「画工・画師」などとしたものが多い。下学集でも画家は多く、「金岡・呉道子・雪窓和尚・牧溪和尚・馬遠夏珪・君澤・楊甫之・日観・舜學・張即之・趙子昂」は画家や書家である。

さて、増刊節用集の「画家・書家」を挙げてみると次の二五語である。

印陀羅〈画工天竺人〉馬麟〈宋朝画工〉芳徐〈画工也尤長牛〉直夫〈画工也〉陸探微〈宋朝画工也尤画聖賢像〉李龍眠〈字伯時也尤画佛像山水〉李安忠〈宋朝画工尤画花鳥獸〉梁楷〈宋朝画工尤画人形〉王元章〈元朝之画工也尤画梅〉王立本〈元朝画工尤画牡丹〉韓幹〈唐朝画師尤工馬形〉顏輝〈元朝画工〉高然暉〈画師也〉戴嵩〈唐朝画工也尤画牛〉卒翁〈画工也尤画布袋〉月山〈元朝画工也尤長馬形〉月壺〈尤画觀音像〉閻次平〈宋朝之画工尤好山水〉玉礪〈宋朝之僧也尤画山水〉徐熙〈宋朝画工也〉所翁〈宋朝画工也〉子教〈画師也〔中略〕妙得佛像〉門無闕〈無準ノ弟子也師牧溪也法眷画〉禅月大師〈僧貫休也尤画

羅漢〉子昭〈元朝之画工也尤工水人物〉

このほか、王維は詩人として知られているが、注に「字名ハ摩詰唐朝詩人也尤詩書」とある。李堯夫には注がないが、例えば永禄二年本に「李堯夫ハ人形山水呂詞賓像寒山拾得八・鳥燕」とあり、画家であることがわかる。そうすると、増補された四〇語のうち二七語が画家・書家であり、しかも印陀羅以外は中国の人名であることになる。これらの項目の基本的な注のスタイルは時代と得意な題材とを掲げるという形である。そしてこの中には増刊下学集と重なる語はみえない。

七九語のうち三九語が下学集からの項目、今挙げた二七語が画家・書家であった。残りは十三語であるが、このうち樊噲は樊噲の重複と見て外すと、残るは十二語である。それを左に挙げるが、語頭に☆を付した六語は先述したように増刊下学集と一致するものである。

☆大伴黒主 ☆元三大師 ☆呉績 孟宗 魔 ☆役優婆塞 定家 家隆 弓削法皇 ☆鍾馗大臣 ☆是害坊 政黄牛郁山主 増刊下学集と増刊節用集との「増」を比較すると、増刊節用集においては明らかに中国の書画家の増補が密に行われている。

III 永禄二年本

収載されている人名は約二二〇である。先述したように下学集との一致率は最も高く、元和版との比較においては元和版の独自項目以外とはすべて一致している。また、増刊節用集と比較すると増刊節用集にあつてこの永禄二年本に採られていないものは七九語のう

ち「大伴黒主・王立本・孟宗・役優婆塞・是害坊」の五語のみである。

単純に比較して増刊節用集から永禄二年本に至るまでに約一四〇語が増補されていることになる。ここでもやはり中国の書画家が多い。まずそれを掲げる。

馬公顕〈人形山水〉馬達〈山水〉*芳叔〈山水竹屋道人〉米元暉〈画山水〉米元章〈善書〉陳子元〈船子図〉張子恭〈文殊〉定山〈山水〉中和〈鷹〉*仲穆〈山水釈迦像〉猪者〈老融弟子牛画〉*張芳叔〈山水竹屋道人〉張伯洪〈觀音人形〉張思訓〈人形佛像〉竹斎〈梅〉陳世榮〈觀音山水釈迦〉陸青〈人形山水〉陸信忠〈佛像十王〉李遵道〈仙樹竹〉李迪〈虎〉李唐〈山水牛〉李成〈山水〉李月潭〈月湖弟子佛像觀音〉李聞一〈佛像〉李方七郎〈佛像〉李堯民〈小景〉劉朴〈觀音〉李楊水〈尤善書〉慍恕仲〈墨跡〉王原〈画馬〉王堯〈宋朝画工山水楼閣〉*王默庵〈宋朝人画人形山水〉王若水〈元朝人画花鳥〉王暉〈福祿寿人形山水〉高延暉〈雪山図〉衡陽緑首世〈羅漢〉姚子厚〈四季図花鳥〉姚彦卿〈山水春夏秋冬四幅〉曜卿〈楼閣松水澗水人形山水〉用田〈栗鼠〉檀芝瑞〈蘭梅竹〉簾宣仲〈石竹山水〉孫知軍〈栗鼠〉孫顯祖〈山水人形〉老澤翁〈鷺鳥〉老融〈牛〉頼庵〈魚蓮〉蘿窓〈人形猿〉君臺仁〈楼閣〉楊叔雅〈梅〉楊枝〈梅〉月蓬〈上下羅漢觀音〉文譽可〈竹〉普悦〈佛像〉胡廷暉〈山水花鳥〉紅眉〈人形〉恒然〈山水雪図又小景〉易元吉〈鹿猿〉惠嵩〈芦雁〉閻立本〈佛像山水〉*趙仲穆〈山水〉趙昌〈花〉趙太年〈山子〉亞子〈觀音〉蔡山〈画羅漢〉姜道〈牛〉迦羅蜜〈梵僧佛像人形ヲ画〉徽宗〈鷹花鳥〉姜納〈牛図〉論法師〈画弥陀〉

成宗道〈觀音〉任康民〈山水人形〉周丹士〈觀音人形〉恕齋〈竹鳥〉壬廉〈鶴〉朱澤民〈山水〉子庭〈古木菖蒲〉思教〈佛像文殊〉*默庵〈宋人画觀音山水〉承訓〈佛像人形〉雪礪〈文殊〉松斎〈善光弟子画梅〉

以上八二項であり、一四〇語の半数以上が中国の書画家である。

ところで右に*を付したものは重複である。つまり芳叔と張芳叔・默庵と王默庵・仲穆と趙仲穆とは同一人物である。同様の事実は増刊節用集で挙げた張月湖(壺)・胡直夫・盛子昭・楊甫之にも指摘できる。また、増刊節用集の注と比較すると、時代に言及することは少なく、得意な題材を掲げるといふシンプルなスタイルになっている。場合によっては印度本の弘治二年本類諸本が「用田栗鼠」とするのように、題材までが見出し語として掲出されることもある。

右に挙げた中国の書画家以外の項目は五二であるが、それを大きく三つに分けて掲げる。

A 日本の人名(九)

伊奘諾 伊奘尊 隱岐院 義経 弘也上人 伝教大師 明恵上人 神宮皇后 慶増

B 外国の人名(二二)

穆王 辯才天 *東坡 杜子美 李白 飲光 遠法師 欧陽*蘇東坡 蘇若蘭 蘇武 蒙古里 国里 堯舜 荆軻 呉子胥 呉道元 閻魔王 巢文 許由 眉間尺 蒙恬 西金居士

C 姓(二二)

般田 服部 土師 香西 香取 行田 撫養 日下 阿野殿 飛鳥井 朝比奈 足助 安宅 城所 木曾 遊佐 結城 美濃 部 三雲 四至内 諏訪

Aは歴史上の人物と仏教者である。Bに入れた辯才天は扁鵲と共にへ部の人倫門に収められている。次節でとりあげる堯空本では扁鵲は人名門に収められているが、辯才天は人倫門のままである。恵比寿や閻魔王などと同様「人名」とはとらえにくい語であるかもしれない。また、「魔」はIIで挙げたように、増刊節用集では人名に収められている。伊京集・龍門文庫本(一七七)も同様である。しかし饅頭屋本では初刊本が人倫に収めるのに対し、通行本は生類に収めている。これは饅頭屋本だけの揺れではなく、節用集諸本において人倫と畜類(気形)とに所属が揺れている語なのである。

Cは姓である。永禄二年本では右に掲げた二一項が載せられている。

節用集には末尾に附録があり、永禄二年本ではその中に「人倫」という項目がある。ここには「伏羲・神農・黄帝」など三二の人名が挙げられている。そしてたとえば伏羲には「造八卦」「制伎楽」、神農には「造五穀」、黄帝には「造衣冠」「造弓箭」「制鞫」という注が付されており、他もほとんどの注が「造」「制」という形である。すなわちこれらの人名は「くを創始した人物」として列挙されているのである、他の附録と共に百科事典的な知識を提供しようとするものである。このうちの蒼頡は下学集にすでに収載されていた語であり、蒙恬は右のBにみえている。

IV 堯空本

節用集の、姓を増補するという方向性についてはすでに指摘したとおりであるが、諸本の中で最多の人名を収載する堯空本でその状

況をみる。

まずナ部について。伊勢本略本系諸本ではナ部に人名をもつものはない。増補本系の辞林枝葉が門名として「姓名」をもつことについては後に触れるが、この本はナ部に「名張・那古屋・名越・檐葉・(檐)崎・南條・長井・中嶋」の八語を収める。広本は人名門に「那突」一語を載せるが、注には「造墨始也」とあって、永禄二年本附録の「人倫」三二語中にみえていた語である。永禄二年本の附録の「人倫」は堯空本では「唐人名」となっており三〇語が収められている。永禄二年本より二語少ないのは重複している伏羲・黄帝を一つずつ削ったからである。印度本類でも多くの本はナ部に人名門をもたないが、永禄二年本類のいわゆる「乙類」「丙類」では人名門を立て二〇前後の見出しを有している。堯空本から挙げると次のようになっている。

行田 内藤 長塩 長井 長沼 長田 長山 中村 長野 中尾 小林 中井 中山 中澤 中嶋 奈良 南条 難波 檐葉 那須 那波 並河 長畔

二三語であるが、先の辞林枝葉の八語と比較すると、重なるものは「檐葉・南条・長井・中嶋」の四語しかない。同じように姓を増補してはいるが、その経路は異なっていると考えられる。また、二三語中第一番目の「行田」は、永禄二年本類乙・丙類以外の印度本系諸本では人倫門に載せられており、ナメタまたはナベタという傍訓が付されている。

つぎにヨ部をみる。伊勢本略本系諸本にはヨ部に人名をのせるものはない。増補本系では広本が「容成(造曆始也)姚子厚(画四季図花鳥也)」「姚彦卿(山水四時)曜卿(椿図松風礪水山水人形)」

用田〈栗鼠〉の五項を載せる。容成を除く四項はさきに掲げた永禄二年本のヨ部と小異はあるもののほぼ一致する。永禄二年本ではこの四項に「義経」を加えた五項がヨ部の人名門に載せられていた。

さて、堯空本ではヨ部人名門に中国の書画家の名はまったく載せられていない。吉見 横川 横山 横路 吉野 吉田 吉川 吉積 世保の九語であるが、いずれも姓である。このように人名門が姓だけによって構成されている部が堯空本ではニ・ヌ・ヨ・ツ・ネ・ナ・ノ・マ・スの九にのぼる。全体としては人名五七七語のうち姓が四九六語となり、それ以外は八一語である。これはIIで取り上げた増刊節用集とほぼ同じレベルである。永禄二年本の人名は約二二〇で、そのうち姓は二一語であったから、約二〇〇語が姓以外の項目であった。IIIで掲げた永禄二年本での増補項目を堯空本で検すると、A・B・Cで挙げた五二項は義経・西金居士を除いて五〇項が一致する。ところが八二項あった中国の書画家ではわずかに米元章〈善書〉李楊氷〈尤善書〉慍恕仲〈墨跡〉月蓬〈上下羅漢観音〉の四項が一致するのみである。さらに下学集・増刊節用集・永禄二年本にはなく堯空本にはあるという人名として印月江〈善書〉・龐居士・婁至徳・詹仲和〈善書〉の四語がある。〈善書〉や〈墨跡〉といった注記が目立ち、少ないながらも書家を増補していることがわかる。堯空本は古本節用集の中で最大の人名を擁するにもかかわらず、中国の画家についてはほとんど増補していないのである。このように同じ永禄二年本類の中での人名の増補といっても、永禄二年本は中国の書画家に厚く、堯空本は姓に厚い、というようにその方向はそれぞれ異なっている。

V 門名について

伊勢本増補本の辞林枝葉宮城本では、巻頭につきのような「綱目」を掲げる。

乾坤門 宮室門 時候門 人倫門 支體門 官員門 草木門
禽獸門 飲食門 衣服門 器財門 姓名門 神祇門 言語門
光彩門 數量門

このように十六の門をもつのであるが、宮城本では綱目のない門も門名だけは立てるといふ方針をとっている。たとえばル部をみるとつぎのようになっている（ここで「」で括っているものは原本では〇囲みである。左右の傍訓と見出し語の次に添えられた草体は省略する）。

〔留〕〔乾〕〔宮〕〔時〕〔人〕流人〔支〕涙痕〔官〕〔草〕〔禽〕
瑠璃鳥〔飲〕〔衣〕〔器〕瑠璃 粟茶〔姓〕〔神〕〔言〕留連 一守
流布 一罪 一浪 一通 一転 一例 一刑 類親 一火 一同 一行
累代

そしてIで述べたとおり姓名門は実際にはすべて「姓」と略記されているのである。また、神祇門を立てて所属が揺れやすい神名はここに収めている（ただし辯才天はない）。

姓名門には合計三〇〇語が収載されている。それではなぜ姓名門なのか。端的に言えば人倫門と区別するためであろう。右のル部で示したとおり、本文での門名はすべて一字目を〇囲みにしてある。このため、人倫と人名とはどちらも「人」となってしまう、区別が付かないのである。しかし、それだけが理由ではないようである。姓名門には先述のとおり三〇〇語が収められているのであるが、そ

のうち一三二語が姓である。堯空本の約五〇〇語には遠く及ばないものの、姓が半数近くを占める。しかも、多くの部で、姓を先に、それ以外を後に掲出しようとしているのである。これは、姓を増補した節用集の他の諸本が姓を人名の後に掲出しようとする姿勢と異なっている。例えばイ部では「今河 一色 板倉 坂 五十嵐 伊藤 庭 駒 石堂 飯尾 犬養 揖斐 五十栖 猪俣 井上 入鹿大」とあり、入鹿大臣が最後に置かれている。サ部では「佐々木 分 竹 齊藤 酒井 相馬 雜賀岸 蒼頡」となっておりやはり蒼頡が最後である。しかし続くキ部では「金輪聖王 欽明天王 耆婆 行基菩薩 吉備大臣 鬼神太夫 黔婁 公任 許由 吉良 木曾 規矩 私市 吉川 北村 競瀧口 衣摺 菊池 喜多野 虚堂」となっており、姓が後に置かれている。人名と姓とが混在する部が一五ある中で、一二は姓が先であり、キ部のように諸本と同じく姓を後に置く部は三部である。このような改変は姓を重視する姿勢を反映していると考えられる。姓名門という門名にも、単に人倫門との区別をするというだけではなく姓を人名の中心にしようという辞林枝葉の姿勢をよみとることができないのではないだろうか。

一方で人名と姓とを別にしようとする動きもみられる。永禄二年本類の高野山本ではマ部に名字という門を立て、「真下」以下二〇の姓を収めている。管見ではこれが伊勢本・印度本類唯一の「名字」門の例であるが、易林本では別に「名字」という門を立てる。先述の通り易林本では後半の四部に人倫門とは別に人名門を立てるのであるが、名字門はその動きとは別に全巻に渡って二〇の部で立てられている。たとえばイ部では神祇門に伊奘諾尊伊奘冉尊を載せる。

次に名字門があり、「今河 一色 板倉 坂 五十嵐 五十棲 伊

藤 伊庭 伊駒 石堂 飯尾 犬養 揖斐」の十三語が収められている。キ部では人倫門に続く人名門に「金輪聖王 欽明天王 耆婆 行基菩薩 吉備大 鬼神太夫」があり、支鉢門・氣形門・草木門・食服門・数量門・神祇門を隔てて名字門に「吉良 木曾 規矩 私市 競瀧口 吉川 衣摺 菊池 喜多野 北村」がある。また、ア部・サ部では門名だけではなく見出し語までが細字双行となっている。このように易林本では名字を別に立てた結果、人倫・人名（神祇も含め）に一一九語、名字に一三八語を収め、合計二五七語となっている。

おわりに

堯空本の附録には先に触れた「唐人名」に続いて「唐朝・宋朝・元朝」という項目がある。唐朝には吳道士〈観音〉論法師〈弥陀〉王維〈山水〉の三語が載せられ、宋朝には東坡〈竹〉戴嵩〈牛〉を始めとする三二語が、元朝には子庭〈菖蒲〉雪窓〈蘭〉を始めとする一三語が載せられている。これらは画家であり、ここに合計四八語が載せられていることになる。この中では東坡・王維・米元章が本文の見出し語と重複しているが、その他は本文には項目として立てられていない。この「唐朝・宋朝・元朝」という附録は管見では他の節用集諸本にはなく堯空本にのみ見られるものである。伊勢本略本からの流れを見れば、この附録の画人名は本文に立項されるのが本来の形であることは明らかであり、堯空本はここに至るどこかの段階で（唐・宋・元朝の）画人名を附録としてまとめたことになっている。この一事が端的に示すように人名は節用集にとって附録にして

もよいものなのであって、必要不可欠な項目ではないと考えられる。それゆえ本によって一語から五百語以上というようなきわめて大きな「ゆれ」が生じているのである。節用集全体としては人名は増補される方向にあり、それは主に中国の書画家と姓という二つの分野に厚いという傾向も見られるが、逆に饅頭屋本のように人名をほとんど削除してしまうことも可能だったのである。永禄十一年本類の草間本には附録に「氏姓」があり、源平藤原橘を始めとする百八の姓を四つに分類して載せている。

地名は人名と同じく固有名詞であるが、歌枕としての地名は節用集を「韻事の書」と考えれば必要不可欠の項目であった。それに比して人名、とくに中国の書画家が直接に韻事と関わることは考えにくい。むしろ節用集に接する人々の生きた空間の中にそれへの興味をかき立てるものがあつたと考えるべきであろう。節用集がやがてもつに至る多くの附録と同様、人名は百科事典的な知識への欲求の表出なのである。

最後になるが、饅頭屋本の「融大臣」はなぜ一語だけ残ったのか。現在のところ「偶然」であると言わざるをえない。多くの人名を削

〈表〉下学集人名と節用集六本の人名との対照

凡例 下学集は『元和三年版下学集』を用いた。項目の上に付した△印は元和三年版の独自項目である。節用集欄は掲載されていなければ部
門名で示し、掲載されていない場合には―で示した。

下学集	増刊下学集	増刊節用集	広本	永禄二年本	堯空本	易林本
聖徳太子	シ人名	シ人名	シ人名	シ人名	シ人名	シ人名

除しながら、すべてを削除しきれなかったということであろうか。

注

(1) 以下、引用に際しては適宜字体を改めることがある。また、見出し語のみを挙げたり、傍訓を()に入れて後ろに添えることがある。へゝは細字双行を、／は改行を表す。

(2) 安田章(一九八三a)のち(一九八三b)に、増刊下学集の「増」と「刊」にふれ、「刊」について「特に外国の人名に関わる場合の多いことが注意される」とし、独自の「増」十一語について「右の「増」が全て何らかの意味で国文学に関連する人物であつたことを思えば、「増」と「刊」とに書写者の指向を考えないわけにはゆかないであろう。」とする。

(3) 安田章(一九八三b)所収「辞書の復権」

参考文献

- 山田忠雄(一九六八)『元和三年版下学集』(古辞書叢刊第二) 新生社
 安田章(一九八三a)『増刊下学集・節用集』(天理図書館善本叢書) 八木書店
 安田章(一九八三b)『中世辞書論考』 清文堂

節用集の人名

鎌足大臣	淡海公	入鹿大臣	役行者	行基菩薩	吉備大臣	道鏡大政大臣	融大臣	輕大臣	小野篁	道風	淨藏貴所	金岡	△安部晴明	△道満	定朝	運慶	安阿弥陀仏	湛慶	鬼神大夫	布袋	寒山拾得	猪頭幌子	蒼頡	孔子
カ人名	カ人名	カ人名	エ人倫	キ人倫	キ人倫	キ人倫	ト人倫	カ人名	ヲ人倫	ヲ人倫	ヲ人倫	カ人倫	カ人名	カ人名	カ人名	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ホ人倫	カ人倫	チ人倫	サ人倫	コ人名
カ人名	カ人名	カ人名	エ人倫	キ人倫	キ人倫	キ人倫	ト人倫	カ人名	ヲ人倫	ヲ人倫	ヲ人倫	カ人名	カ人名	カ人名	カ人名	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ホ人倫	カ人倫	チ人倫	サ人倫	コ人名
カ人名	カ人名	カ人名	エ人倫	キ人倫	キ人倫	キ人倫	ト人倫	カ人名	ヲ人倫	ヲ人倫	ヲ人倫	カ人名	カ人名	カ人名	カ人名	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ホ人倫	カ人倫	チ人倫	サ人倫	コ人名
カ人名	カ人名	カ人名	エ人倫	キ人倫	キ人倫	キ人倫	ト人倫	カ人名	ヲ人倫	ヲ人倫	ヲ人倫	カ人名	カ人名	カ人名	カ人名	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ホ人倫	カ人倫	チ人倫	サ人倫	コ人名
カ人名	カ人名	カ人名	エ人倫	キ人倫	キ人倫	キ人倫	ト人倫	カ人名	ヲ人倫	ヲ人倫	ヲ人倫	カ人名	カ人名	カ人名	カ人名	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ウ人倫	ホ人倫	カ人倫	チ人倫	サ人倫	コ人名

△毛嬙	西施	趙子昂	張即之	舜學	日觀	楊補之	君澤	夏珪	馬遠	牧溪和尚	雪窓和尚	吳道子	白樂天	伯樂	王羲之	張良	樊噲	扁鵲	耆婆	閔子騫	原憲	顏回	鉄拐仙	老子
	セ人名	ス人倫	ソ人倫	シ人名	シ人名	ホ人倫	ク人倫	カ人倫	ハ人倫	モ人名	セ人名	コ人倫	ハ人倫	ハ人倫	ワ人名	チ人倫	ハ人倫	ヘ人倫	キ人倫		ケ人倫人名		テ人名	ラ人倫
	セ人名	テ人名	チ人名	シ人名	シ人名	ヤ人名		カ人名	ハ人名	ソ人名	セ・ソ人名	コ人名	ハ人名	ハ人名	ワ人名	チ人名	ハ人名	ヘ人名	キ人名	ヒ人名	ケ人名	カ人名	テ人名	ラ人名
	セ人名	ス人名	ソ人名	シ人名	シ人名	ホ・ヤ人名	ク人名	カ人名	ハ人名	モ人名	セ人名	コ人名	ハ人名	ハ人名	ワ人名	チ人名	ハ人名	ヘ人倫	キ人名	ヒ人名	ケ人名	カ人名	テ人名	ラ人名
	セ人名		ソ人名										ハ人名	ハ人名	ワ人名	チ人倫	ハ人名	ヘ人名	キ人名	ヒ人名	ケ人名	カ人名	テ人名	ラ人名
	セ人倫		チ人倫	シ人名	シ人名	ヤ人倫		カ人倫	ハ人倫	モ人倫			ハ人倫	ハ人倫	ワ人倫	チ人倫	ハ人倫	ヘ人倫	キ人名	ヒ人倫	ケ人倫		テ人倫	ラ人倫

節用集の人名

△女英 △娥皇 △褒姒 楊貴妃 李夫人 王昭君

| | | | | |

| | | | 里人名 ワ人名

| | | ヤ人名 里人名 ワ人名

| | | ヤ人名 里人名 ワ人名

| | | ヤ人名 里人名 ワ人名

| | ホ人倫 ヤ人倫 里人倫 ワ人倫